

20. 池田町での検死の実際

—豊頃町大津漁港で発見された身元不明者の池田警察署での身元確認業務—

○大熊 一豊, 森 真理*, 小鷲 悠典*

(大熊歯科医院, *北海道医療大学歯学部歯科保存学第一講座)

【目的】現代社会では犯罪や災害が複雑多様化しておりこれに伴う犠牲者の身元の確認が困難な事例も多く、歯科医師にしか行うことのできない口腔内所見による個人識別作業の重要性はますます高まっている。

【症例】平成13年8月に豊頃町大津漁港で身元不明遺体が発見され、池田警察署の霊安室運ばれた。警察では遺体の身元はほぼ確認できているが、遺族に引渡しを行う上での確実な決め手が欲しいということで、遺体のデンタルチャートを作成し、以前に通院していた歯科医院から提供された診療録やX線写真と比較して両者は同一人のものであると判定した。

【結果および考察】今回の事例で決め手になったのは、治療途中の歯が一致したことでX線写真が作成したデンタルチャートと矛盾なく一致したことであった。歯科的所見が個人識別に有効な根拠として歯が人体組織中でもっとも硬く、変化しないまま残存する可能性が高いこと、物理的、化学的に安定であること、遺伝的要素もあり大きさ、色や形、歯並び等は個人特有のものであることがあげられる。さらに、虫歯の有無や歯科治療痕により、口腔内所見が指紋と同様に万人不同であることは

固有性があることがある。また虫歯は国民的疾患であり罹患率が高く歯科の受診率も高いため、カルテやレントゲン写真として治療の記録が残っており、法的な保存期間はあながた歯科医院等に保存されていること、また学校歯科検診があることに加え、今後は事業所検診の必要性も言われているので歯科的所見は記録として具体的に残り記録の保存性が高いことの3つがあげられる。これらは時として指紋よりもその有用性を発揮する。歯科的所見からわかることは、歯の歯髄は硬組織に保護されており血液型・DNA型が判明でき、人種や性別も明らかにできることと、咬耗や磨耗、歯髄腔の狭窄などで年齢が推定できることと、メタルボンドやインプラントなどの高価な補綴物や虫歯の数、治療の程度などによって風俗や習慣、社会的経済状態が判断できることがあげられる。

「法歯学的アプローチは身元不明者の割り出しに非常に有効な手段となりうる」ものであり、歯科医師に与えられたもう1つの新たな役割として担当した症例で明らかにした。

21. 口腔顔面痛・麻痺の患者に対する北海道医療大学歯学部附属病院歯科麻酔科の治療状況および脳波・心拍変動・皮膚温による評価

○河合 拓郎・工藤 勝・大桶 華子・國分 正廣・新家 昇

(北海道医療大学歯学部歯科麻酔学講座)

【目的】口腔顔面痛や三叉神経・顔面神経麻痺などに、当科では星状神経節ブロック療法（局所麻酔剤注射液を患側の第6頸椎横突起上に、前方から注射する交感神経節ブロック、以下SGB）や針・磁気通電療法（以下、ツボ刺激）を適応している。SGB・ツボ刺激後に患者は、顔に「温かさ」を感じ、傾眠状態となる。SGB・ツボ刺激の効果を見極めるために、脳波と心拍変動（以下、自律神経活動、LF）、顔面皮膚表面温（以下、皮膚温）を定量評価した。

【方法】平成14年1月から12月まで、「口腔顔面の痛み・麻痺」を主訴で当科を受診した患者8名（男3名/女5名、年齢：19～82歳）について調査した。治療方法はSGB、ツボ刺激および薬物療法とした。毎回、治療の効

果を確認するため、皮膚温をサーモレーサ（NEC, TH5104R）で測定した。また11月末に治療中の3名の患者を対象に、SGB前後の脳波成分と自律神経活動を脳波・心電リアルタイム解析システム（GMS, MemCalc/Makin）で前向きに観察した。

【結果】患者延べ数は57名（当院歯科患者総数の0.15%）、他歯学部病院の1/10程度であった。経過は、治療2名、継続中2名、他院へ紹介2名、遠隔のため治療断念2名であった。SGBにより脳波は α 波に続き δ 波が増加し、患側皮膚温は5分後に1.1℃上昇した。

【考察】今回の結果から、歯科医師と患者に対する、「口腔顔面の痛み・麻痺の治療法と効果」をピーアールし、潜在する患者を集めなければならない。なお、SGB・ツ